

# メタファーと認知 3

兼 沢 純 子

## 1. 認知的な視点

私たちを取り巻く世界は、私たちの外部に客観的に存在していて、事物には、はっきりとした輪郭があり、言語はその外部世界を記号化する自律的な体系をなしているかのように思われるが、すべての場合においてそうではない。私たちが外部世界をとらえようとする時に、私たちは外部の事態、状況をそのままコピーするのではなく、私たちの「解釈」がそこにかかわってくる。心理学における Figure と Ground の分化の理論のように、複数ある外部の事態、状況のどちらを背景とするか、前景とするかという認知的な視点のとり方によって、同じ事態、状況に対する私たちの解釈が異なってくる。

言語も、世界を客観的に記号化するのではなく、言語主体による認知というフィルターを通して記号化がされるのである。特に、日常言語においては、多くの場合、認知主体である私たちの身体の感覚的、運動的経験に基づいた主観的な認知を通して、記号化が行われる。言語に外部世界に対する話者の認知が反映されていると見るなら、言語の意味は、その客観的な指示対象によって唯一に決定されるとは限らず、その指示対象に対する話者の認知を通じた解釈が、意味の決定に大きな役割を果たすことになる。

言語が認知というフィルターを通して、世界を記号化するという点から見ると、パラフレーズ関係に対する違った見方が生じる。基本的に同じ事態、状況の伝達を可能とする複数の表現は、同意関係ないしはパラフレーズ

関係にあると言われている。

(1) A red sports car was behind the bus.

The bus was in front of a red sports car.

(2) The dealer sold the car to my friend.

My friend bought the car from the dealer.

(Quirk et al. 1972)

こういった同じ意味を表すとされる文の言いかえは、同じ深層格を付与できるなど、真理条件的には同じものとみなされる。しかし、認知的に見ると、外部世界を認知主体が解釈し、言語にコード化していくときに、話者の事態、状況の把握の仕方、対象に対する概念化の違いが言語形式に反映されるので、話者の視点、焦点、主題などの提示の仕方が異なり、二つの文は同じ意味ではないということになる。英語における語順、態などの多様な文法現象の背後には、この認知的な視点からの事態、状態に対する種々の概念化の違いが存在する<sup>1</sup>。

## 2. メタファーと認知的な視点

言語現象の背後に認知的な視点がかかっているとすれば、言語にあらわれるメタファー表現にも、世界をどうとらえるかという認知的な視点がかかってくる。

Lakoff & Johnson (1980) によると、メタファーは言語を用いて、ある対象をよりよく表現するレトリックとしてだけのものでなく、対象を概念化するためのものでもある。メタファーにおいては、起点領域(source domain)

から目標領域 (target domain) にその概念構造が写像される。起点領域でのある対象に対する理解を目標領域に移し替えることにより、目標領域での対象に対する理解、いわば、見立てによる理解が得られる。ここでいうメタファーは、私たちの対象に対する概念を把握することを助け、概念構造を作り上げる働きを持つ概念メタファーのことである。概念メタファーは、人間の認知や概念構造と密接に関わり、言語表現においてだけではなく、私たちの思考や行動といった日常生活にまで浸透している。

この概念メタファーが、言語表現としてのメタファー表現に反映される。言語表現にあらわれたメタファー表現としては、従来メタファーとして取り扱われてきた隠喩や直喩といった強いメタファー性を持つものから、基底にある概念メタファーから生み出されたメタファー性の弱い、通例メタファーと意識されないメタファー表現までが含まれる。

(3) Sometimes too hot the eye of heaven shines.

(Shakespeare)

(4) Time melts away for her like snow.

(5) Dame Kiri may well feel that time has speeded up  
year by year. (Vardaman 1997)

(3)は隠喩、(4)は直喩、(5)は意識されないメタファー表現の例である。

ある対象をメタファーによって理解していく場合に、認知主体である人間の対象を見る視点が大きく関与する。以下では、山梨 (1995) に述べられている二つの視点にそって論をすすめていくことにする。山梨 (1995) は、外部世界を理解する視点として、〈中核的〉な視点と〈顕現的〉な視点を区別している。〈中核的〉な視点とは、「問題の対象を外延的に特徴づける視点」を意味し、〈顕現的〉な視点は、「その対象を解釈する主体の主観的な視点」を意味している。後者の視点は、主体としての人間が、問題の対象を「主観的に区別する認知的な視点で、必ずしも客観的な事実によって裏付けられている保証はない」。この視点からの特徴づけは、「問題の対象のすべての事柄に適用される保証はない」。たとえば抽象的な対

象である人生を具体的な対象である旅に見たてて、具体的な対象の特性〈始まりと終り、目的、出会い、困難など〉を抽象的な対象に写像する場合に、具体的な対象のすべての特性が写像元である起点領域 (旅) から写像先である目標領域 (人生) に写像されるわけではなく、写像される特性は、話者によって取捨選択される。ここに認知的な制約が存在すると山梨 (1995) は述べている。この場合、メタファー写像にかかわるのは、〈中核的〉な視点に基づく特性よりも、〈顕現的〉な視点に基づく特性である。言葉をかえて言えば、普遍的な特性というよりは、主体としての人間の取捨選択による主観的な特性である。この種の特性は、「各言語の社会的、文化的背景により相対的に決定される」もので、常識的な知識や日常生活の経験を介して主観的に決められる認知的な特性といえる。極端な場合は、個人的な主観にだけ基づく特性というものも存在する。

山梨 (1995) は認知的特性である、〈顕現的〉な視点に基づく特性の例として、狼のプロトタイプの特性としての、〈FIERCE, DANGEROUS, VICIOUS, etc.〉を挙げている。プロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体を言い、あるカテゴリーを考える場合に、まず頭に浮かぶ、そのカテゴリーの代表的な成員である (河上 1996)。あるカテゴリーのプロトタイプの特性は、日常生活の具体的な経験や、常識的な知識を介して得られるもので、社会的、文化的な文脈により決定され、その文脈によってゆれが見られる。これらの特性は、人が狼をどうとらえているかということに関連していて、〈ANIMATE, MAMMAL, etc.〉といった〈中核的〉な視点に基づく特性よりも、メタファーに使われるとしている。この種の特性の写像は、文脈に依存する創造的なメタファー表現に使われ、「その場その場の状況に依存して使われる生きた比喻の一種で、創造的で新奇な表現として、その場の文脈に応じて無限に作り上げられる」。ただし、その場合も、そのメタファーが効果をあげるためには、先に述べた常識的な知識や日常生活の経験というものにある程度依存していることは言うまでもない。

〈中核的〉な視点に基づく特性がメタファー写像に使

われる場合もある。かなり慣用化され、言語の中に組み込まれていて、比喩であることが意識されないような表現で、特定の文脈なしに理解されるような場合である。これは、〈中核的〉な視点が対象を例外なく規定することができるからである。(6)は〈中核的〉な視点に基づく基本的な特性〈土台、柱、骨組みなど〉が使用されたメタファー表現の、(7)は〈顕現的〉な視点に基づく例外的な特性〈窓、廊下、玄関など〉が使用された文脈に依存するメタファー表現の例である。

(6)Recent discoveries have shaken the theory to its foundation.

(7)This theory has no windows. (Grady et al. 1996)

### 3. メタファーと概念化

#### 3.1 メタファーとプロトタイプ

〈顕現的〉な視点に基づく特性がメタファーに写像されている例を日常言語の中から見えていくことにする。この場合、語彙項目のプロトタイプ的な意味や、あるカテゴリーのプロトタイプ的特性、また、あるカテゴリーの中の成員として想起されるプロトタイプが大きく関与する。以下の文中で大文字で表記されたものは概念メタファーを表す。

(8)Gemma is a silver spotted tabby with a white blouse and socks to match. (Ivory 1989)

猫の毛色を描写した表現であるが、ここで行われているのは、衣服の領域の概念構造から猫の毛色の領域への写像である。(8)は、胸の毛が白くて、足の先が白い猫のことを言っている。

blouse という語を、Random House Dictionary でひいてみると、第一の意味として、usually lightweight, loose-fitting garment for women and children, covering the body from the neck or shoulders more or less to the waistline, with or without a collar and sleeves と記述されている。これがブラウスのプロトタイプとして想

起される概念だと思われる。(8)の表現に接した人は、ブラウスのプロトタイプを連想し、猫の胸の白い部分がどういうものかを理解することができる。

socks についても同様である。sock の意味は a short stocking usually reaching to the calf or just above the ankle (RHD) とある。ここでのソックスのプロトタイプとして想起されるのは短い靴下のことで、猫の足先だけが白いという特徴が示される。

(9)Ragdolls come in various colors, including pointed patterns with or without white mitts on the feet.

(Microsoft Encarta '95)

同じように猫の足先が白いことを描写しても、このメタファー表現から想起されるプロトタイプは異なる。そこから、(8)、(9)の話者の対象に対する認知的な視点がわかる。(8)は、猫の足を足としてとらえ、(9)は猫の足を手としてとらえている。日本語でも足の先が白い猫のことを「白足袋をはいた猫」と表現することがある。これらの表現の基底にある概念メタファー (CAT'S COAT IS CLOTHING) は同一でも、言語により、表層にあらわれたメタファー表現が異なる例である。メタファーが、人間の認知活動にねざしており、その人間の経験の場である社会的、文化的文脈を反映しているからである。

猫の毛皮を言う時に、coat という表現が用いられる。

(10)The domestic cat's original coat color was probably greyish-brown with darker tabby stripes.

(Microsoft Encarta '95)

ここでの coat の意味は、人間の衣服というプロトタイプ的な意味から、猫の毛皮にメタファー的に拡張されて獲得された意味であるが、ここに既に衣服の見立てが行なわれている。

このように、メタファーがプロトタイプと関係があることは、人がある対象を理解するとき、それをカテゴリー化し、そのプロトタイプを頭においていることと関連がある。異なる領域間の写像が行われるときに、そこ

で行われているのは、概念構造の客観的特性の写像ではなく、人が概念化するプロトタイプ的特性、山梨 (1995) のいう〈顕現的〉な視点に基づく特性の写像である。

(8)の表現の基底にある概念メタファーを、**A CAT IS A PERSON** という、もっと広いものとも考えることもできる。今までレトリックで擬人化とされてきたこの種の表現は、対象を人間に見たてて、私たちが理解している人間のさまざまな面や、人間に対する私たちのさまざまな見方を通して対象を理解することを助ける。(8)の場合は、衣服を身につけるという〈顕現的〉な視点に基づく特性からなる概念構造を猫に写像したメタファーであると言える。このメタファーにより、猫を動物としてではなく、人のように見るという認知的な視点が伝えられる。

同じような擬人化のメタファー表現は、けやきの木が風の中で揺れている様子を描写した(11)の文でも見られる。

(11)They swayed to and fro, nodding and shaking their leafy heads in the big wind. (Milward 1992)

### 3. 2 新しい概念とメタファー

今までになかった新しい概念を導入するときにも、メタファーが使われる。コンピュータのオペレーティング・システムを新しく導入するとき、そのシステムの背後にある概念を言語化するのに、メタファー写像が行われている。それを、ウィンドウズ 95 を例にとりて見ていくことにする。この場合、その GUI という性質上、言語だけでなく、アイコンというビジュアルなメタファー表現も使われている。ある概念を別の概念を通して理解するというのがメタファーの働きであり、メタファーがものごとを概念化するためのものとするなら、メタファー表現が言語だけに限られる必要はない。

ウィンドウズ 95 を使用したことがある人なら、コンピュータの画面に表示されるものが、オフィスのメタファーであることはすぐにわかる。ファイルがあり、メモ帳や電卓があり、ブリーフケース、ごみ箱まである。この基底にあるのは、**COMPUTER WORK IS OFFICE WORK** という概念メタファーである。現実のオフィスの備品から、そこに写像されているのは、その備品の客

観的、物理的特性というよりは、私たちが日常の経験を介して得た、主観的なその機能的特性である。山梨 (1995) のいう〈顕現的〉特性である。物理的な外観のほうは、アイコンにまさしくアイコンとして反映されている。現実世界では、ファイルはフォルダに入れられて、キャビネットに納められるが、コンピュータの世界では、ウィンドウズ 3.1 ではキャビネットに、ウィンドウズ 95 ではファイルはフォルダに納められているというアイコンによるメタファー表現が用いられている。そのアイコンを見るとき、私たちがそこに見るのは、客観的、物理的特質を持つ物体としてのフォルダでなく、経験を介して知っているその機能である。

次に、言語表現に現れるコンピュータのメタファーを見る。(12)は、**PROGRAM IS A VEHICLE** という概念メタファーが言語表現に反映されている例である。

(12>Loading a file into a Window 95 program can be a mite complicated sometimes.

(13)How do I run my old DOS programs ?

(14)Some DOS programs are easy to run under Windows95. (Rathbone 1997)

(13)、(14)の基底には、**PROGRAM IS A VEHICLE** の他に、**PROGRAM IS A MACHINE** という別の概念メタファーの存在も考えられる。メタファーの成立が、言語主体に任されている認知的なものであるから、一つの表現の基底に複数の概念メタファーが存在することもありうる。その中のどの概念メタファーを選ぶか、言葉をかえて言えば、どの領域間の写像を行うかによって、一つの表現が伝える認知的な意味、その表現が与えるイメージが異なることになる。その結果、ときとして、話者のメタファーによる概念化と、聴者によるその理解の間にずれが生じることがある。

今度は、いくつかのメタファーが複合的に関わっている例を、コンピュータウィルスのメタファーで検討する。この基底にある概念メタファーには、**PROGRAM IS VIRUS**、**A COMPUTER IS A PERSON**、**PROGRAM IS A VEHICLE** が含まれる。この場合は、**PROGRAM IS**

A VEHICLE と PROGRAM IS A MACHINE のようにお互いを排除しないで、複合的に働く。

コンピュータウイルスをよく知らない人にとっても、この複合的メタファーによって、自分の熟知している概念を通して、コンピュータウイルスの概念の理解が容易になる。ここではウイルスの〈中核的〉な視点からの生物学的な特性〈RNA か DNA と蛋白質の保護膜からなるなど〉よりは、人がウイルスというものに対して持つ主観的なイメージが概念化に関与する。〈外部から何かを媒介して侵入し、組織内で自己増殖し、感染したものに害を及ぼすなど〉といった特性である。このウイルスの特性は、山梨 (1995) のいうプロトタイプとしてのウイルスを規定している〈顕現的〉特性である。言語主体である人間の認知による、知覚や機能にかかわる主観的な〈顕現的〉視点からの特性が、メタファー写像に用いられるプロトタイプの決定に大きな役割を果たしている。このプロトタイプを決定する特性は、対象の中に客観的に存在するのではなく、対象を把握する人間の主観的な認知作用による。

起点領域であるウイルスも、VIRUS IS AN OBJECT という概念メタファーを持つメタファー表現として言語化されている。

(15) The entire Wainwright family became ill with flu-like symptoms that continued to flare up every few months. Denise Wainwright assumed that they were all simply passing a virus back and forth.

(Ladies' Home Journal 1997/6)

ウイルスの領域の特性とコンピュータウイルスの領域の特性には、類似性が見られる。この類似性に着目して、概念メタファーが形成され、それを基盤として、コンピュータウイルスに関するメタファー表現が生み出されている。

(16) Computer virus is a program that infects computer files by inserting in those files copies of itself.

(17) Worm is, in computer science, a program that

propagates itself across computers, usually by spawning copies of itself in each computer's memory.  
(Microsoft Encarta '95)

(15)に見られるように、ウイルス自体の概念がメタファーによって構造化され、この概念が今度はコンピュータウイルスに写像され、メタファーが成立し、(16)、(17)の表現が生まれる。

メタファー写像において、起点領域に付随する価値判断を写像することで、本来目標領域にはなかった価値判断が付与されることがある。この場合は、コンピュータウイルスが、生物学的なウイルスのように、コンピュータに害をなす厄介なものという認識や、目に見えない脅威というイメージが生まれる。

#### 4. メタファーと語彙項目の意味の拡張

今までは、私たちが対象を概念化するときに大きな役割を果たす概念メタファーと、それが言語表現に反映されたメタファー表現について論じてきたが、メタファーは語彙項目の意味の拡張においても、大きな役割を持つ。コンピュータのような新しい領域においては、新しい概念を表現する言葉を新しく作り出すのではなく、今までにあった言葉の意味から、メタファーやメトニミー、イメージ・スキーマ変換などの動機づけによる拡張を通して、新しい意味を作り出すプロセスが見られる。

メタファーによる意義の拡張は、プロトタイプの意義から類似性に基づいて行われるが、その類似性の判断は、言語主体の認知を通じた経験から得られた判断である。これは〈顕現的〉視点に基づく判断である。その意味で、語彙の意味カテゴリーは、定義的な規定だけでなく、その語の用いられる文脈、それも場面的文脈だけでなく、文化的、社会的な、より一般的な文脈に依存する。

(18) You've got insurance if Johnny crashes the company car. But what if he crashes the company computer?  
(PC World 1997/6)

(18)において、*crash* の語義は、プロトタイプの意義としての、車の領域における、*to collide esp. violently and noisily (RHD)*, *to (cause to) have a sudden violent, and noisy accident (LDCE)* から、コンピュータの領域において、*COMPUTER IS A VEHICLE* という概念メタファーによって拡張されて、*to shut down because of a malfunction of hardware or software (RHD)* という意義を、新しく獲得したものと考えられる。この場合、プロトタイプの意義は必ずしも歴史的な原義である必要はない。メタファー写像が行われる起点領域の特性はその目標領域の特性との類似性により、言語主体によって選ばれる。ここで写像されている特性は、〈*sudden, violent, accident, etc*〉で、〈*noisy*〉という特性は写像されていない。車の領域とコンピュータの領域の間の特性を、言語主体が判断して取捨選択し、選択された特性の写像が行われている。

中心的な意味が、特定の文脈を与えられることで、周縁的な意味に拡張されることは、語彙の意味の拡張だけでなく、イディオムにも見られる現象である。

## 5. 結び

今まで見てきたように、メタファーには、概念を作り出し、価値判断を付与し、新しい意義を獲得するなどの働きがあるが、メタファーの生産と理解は、人間の認知的な視点と密接に関連している。人がその対象をどう認知しているかをメタファーが語ってくれる。その意味で、メタファーと言語主体とのかかわり、ひいては言語と言語主体とのかかわりという観点から、メタファーや言語を研究していくことが今後ますます重要になると考えられる。

### 注

1. 話者がどのように文を提示しようとしているかという語用論的文脈によっても、また、文がどのような談話の流れの中にあるかというテクスト的な文脈においても、二つの文は同じでない。世界をどうとらえているかを言

語が反映していると同時に、世界をどう提示するかも、文の意味ということを考えるときに大きな役割を演じる。こういった観点からの動機づけも文の産出に関わる。この意味で、今後、認知言語学と語用論、談話研究などを関連づけて研究する必要がある。

2. Grady, Taub & Morgan (1996) は、*THEORIES ARE BUILDINGS* という概念メタファーを取り上げてその特性の写像が言語現象に反映されていないことから、メタファーを基本メタファー (*primitive metaphor*) に分割して、その基本メタファーを組み合わせて、複合メタファー (*compound metaphor*) を作り上げるべきだと提案しているが、山梨 (1995) の〈中核的〉な視点に基づく特性と〈顕現的〉な視点に基づく特性という考えを導入すれば、Grady, Taub & Morgan (1996) が反例として挙げた(6)、(7)の用例が、概念メタファーである *THEORIES ARE BUILDINGS* を反映していることが説明できる。

### 用例出典

Lesley A. Ivory 1989 *Meet My Cats*, Collins

Peter Milward 1992 *Country Diary in Tokyo, Nan' un-do*

Randolph Quirk, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik 1972 *A Grammar of Contemporary English*, Longman

Andy Rathbone 1997 *Windows 95 for Dummies*, IDG Books

James Vardaman 1997 *Selling America*, Macmillan Languagehouse,

William Shakespeare *Sonnet 18*: "Shall I compare thee to a summer's day?"

### 参考文献

兼沢純子 1994 *メタファーと認知* 大阪芸術大学紀要 No17

1995 *メタファーと認知 2* 大阪芸術大学紀要 No18

河上誓作 1996 *認知言語学の基礎* 研究社出版

- 山梨正明 1995 認知文法論 ひつじ書房
- マーク・ジョンソン 1991 心の中の身体 紀伊国屋書店
- Goldberg, Adele E. (ed) 1996 Conceptual Structure,  
Discourse and Language, CSLI Publications
- Grady, Joe, Aarah Taub & Pamela Morgan 1996  
“Primitive and Compound Metaphors” in Goldberg,  
Adel. E. (ed) 1996
- Kraynak, Joe 1994 The Complete Idiot’s Guide to  
Computer Terms, Alpha Books
- Lakoff, George 1987 Women, Fire, and Dangerous  
Things, The University of Chicago Press
- Lakoff, George & Mark Johnson 1980 Metaphors We  
Live By, The University of Chicago Press
- Sweetset, Eve E. 1990 From Etymology to Pragmatics,  
Cambridge University Press
- Taylor, John R. 1989 Linguistic Categorization,  
Oxford University Press
- Ungere, Friedrich & Han-Jorg Schmid 1996  
An Introduction to Cognitive Linguistics, Longman
- Microsoft Encarta ’95 1994 Microsoft Cooperation
- Longman Dictionary of Contemporary English,  
1978 Longman
- The Random House Dictionary of English Language,  
2nd Edition, 1987 Random House